（別紙　２）

論文審査の結果の要旨

氏　　名　　山本　良

本論文は戯作全般を指していた「小説」という語が、明治維新後に次第に「ノベル」の誤訳として定着していくまでの変革期の様相を考察したものである。構成は八章からなり、一、二章は、幕末から明治初期の実録小説を検討の対象にしている。松村春輔『春雨文庫』が実録と政治小説の過渡的性格を持つ点に注目し、これを「居留地」であった当時の日本の状況に重ね合わせた上で、攘夷思想に依りながらもそれとも微妙に性格を異にする、あらたなナショナリズムの萌芽を読みとっている。明治七年の台湾出兵、明治十五年の壬午の変を契機に、それぞれ日本人の東アジア観が変質していく様相を分析したくだりとともに、「近代国家」意識の形成過程を具体的に明らかにした成果として注目に値するものである。

三、四章は政治小説を対象にしている。これまでの自由党系の作品に分析が集中してきたこと、また所属する政党によって作品が切り分けられてきた事実を問題点として指摘した上で、フランス革命やロシアの皇帝暗殺事件が当時の政治小説にどのようにとりあげられていくのかを実証的に明らかにしている。非政治小説として区分されてきた稗史小説に、士族のイデオロギーでは裁ききれない政治的なメッセージが読みとれるという指摘は、あらたな視点を提示したものとして注目に値しよう。

五、六章は翻訳小説を対象にしている。坪内逍遙の『斑烈多物語（ハムレット）』を逍遙の使用したテクストと比較考察した上で、翻訳に浄瑠璃の文体が採用されるに至った必然性が浮き彫りにされている。西洋の「性　格（キャラクター）」の概念を江戸文学の枠組みで受容しようとした結果生ずるさまざまな軋轢を分析したくだりは多くの新見を含んでおり、今後の研究に示唆を与えるものである。『小説神髄』前後の「小説」概念の変容を論じた七、八章もこれに関連しており、人物の具体的な「感情」を美学的に捉えようとした逍遙の意図に、江戸期の「気質（かたぎ）もの」からの脱皮の志向がたどられている。心理学から美学へ、という時代的な知の枠組みの変遷を踏まえたその考察は、従来の坪内逍遙観に大きな変更を迫るものとして注目される。

総じて文章や論理展開が晦渋になる傾向が見られるが、変革期における国家意識の変容、異質な文化相互の軋轢を実証的に明らかにしたその成果は、これまで手薄であったこの時期の文学史の見直しに寄与するものとして十分な評価に値する。以上の点から、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。